

タキイのエダマメ栽培マニュアル

作型		3	4	5	6	7	8	9	10
露地	冷涼地			●	●	●	■	■	■
	中間地		●	●	●	■	■	■	
	暖地	●	●	●	■	■	■		

適期表記号説明

- : タネまき
- : 育苗期
- : 生育期
- : 収穫期
- : 適宜播種可能

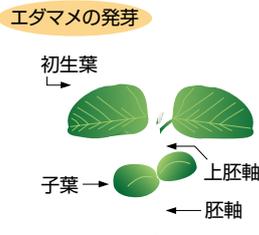
エダマメの発芽

発芽適温 **25~30℃** (15℃では遅延し、10℃以下ではきわめて発芽不良となります。発芽に時間がかかると種子が腐敗します)

普通栽培では、4~5月に播種をする早い作型に早生品種、5~6月に中生品種、6~7月の遅い作型に晩生品種を用います。晩生種を早まきすると、莖葉だけが繁茂し着莢が悪くなります。



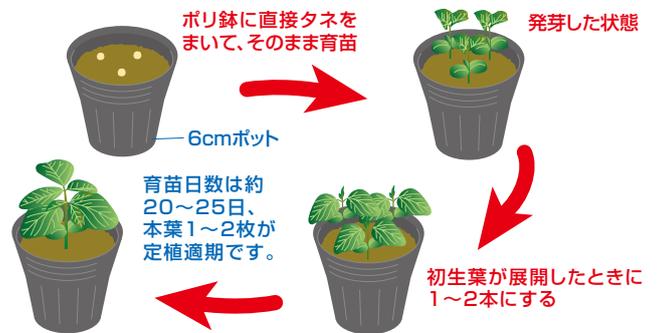
エダマメの発芽



エダマメの発芽

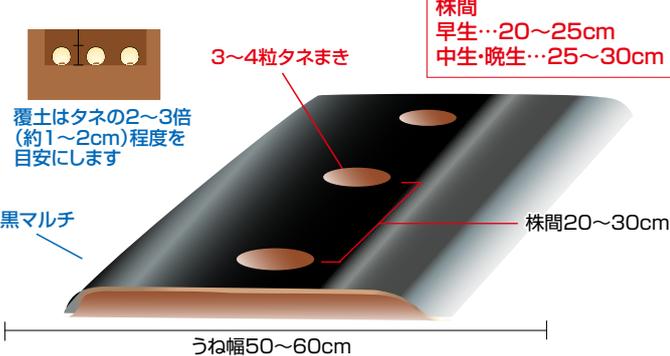
エダマメのポット育苗

エダマメは、ポットにまいて育苗し、定植しても栽培できます。育苗には温度を確保できる場所が必要です。最低気温が10℃以上になったころ根鉢をくずさないように定植します。4月に定植する場合は、トンネルを利用します。



エダマメの播種(直播)

播種の目安は、最低地温15℃以上になったころです。一般地では晩霜のおそれなくなる5月上旬ごろになります。マルチは生育初期の地温を高め、水分と肥料分を保持する働きがあるのでぜひ利用するようにしましょう。



株間
早生...20~25cm
中生・晩生...25~30cm



欠株を防ぐため1穴に3~4粒播種し、本葉が2枚くらいまでに1~2本に間引きします。生育のよいものを残して、そのほかの株は根元をハサミで切り取ります。

施肥量

元肥は目安として10㎡当たり成分量で、チッソ60~70g、リン酸120~150g、カリ100gを施用しますが、肥沃な畑ではチッソを50gに減らします。エダマメはチッソ分が多いと莖葉が大きくなりすぎて、着莢や莢肥大の妨げになり収量が減少したり、病害虫の被害が多くなるので注意します。

エダマメの種類

エダマメはダイズの未熟莢を収穫するもので、植物学的には全く同じ植物です。

【エダマメの栽培型】

一般に、温度と日長に対する反応から①夏ダイズ型②秋ダイズ型③中間型の三つの型に分けられます。①夏ダイズ型品種(早生種)は春に播種して夏に収穫する型で、温度に対して敏感ですが、日長に対しては感応が鈍い感温型品種です。②秋ダイズ型(晩生種)は夏に播種して秋に収穫する型で、短日になると、開花・結実が促進される品種で、いわゆる感光型品種です。③中間型(中生種)は両者の中間性を示す品種になります。毛茸の色には茶褐色と白色とがありますが、白毛のものが外観的に好まれます。エダマメの開花は極めて多いですが実際に結実するのは半分以下で、残りは生理落下します。

【エダマメの種類】



普通種

茶豆

黒豆

子実の色により普通種、茶豆、黒豆などに分類されます。普通種(子実の色は肌色)…一般に栽培される品種は大豆をエダマメ用に改良したもの。白毛と茶毛のものがあり。極早生から晩生まで種類も多い。

茶豆…独特の香ばしい香りや風味がある。山形や新潟で作られる茶豆が有名。

黒豆…甘みが強くエダマメの中でもっともおいしいといわれる。「丹波黒大豆」に代表されるように大粒で品質にすぐれるものが多い。

エダマメの生育



エダマメの発芽後



間引き後



生育途中



開花

落花、落莢の原因

開花初期の7～10日程度が最も重要な時期。この時期のストレスは影響が大きい。

- ・水分不足 ・肥料分の不足
- ・低・高温で不受精 ・日照不足

莢が肥大するころは、カメムシやサヤタババエに注意

収穫遅れに注意(収穫適期は3～5日程度)



肥大途中の莢

生育適温 20～25℃ (昼夜の温度差があるとよい)

生育初期よりアブラムシの予防を行う

鳥害を防ぎ、発芽をよくするため不織布のベタかけを行うとよい

発芽がそろったらベタかけをとる



播種

発芽温度(地温)は25～30℃が適温

発芽

(過湿の注意)

間引き

本葉2枚までに1～2本にする

1回目 土寄せ(本葉3～4枚)

2回目 土寄せ(本葉6～8枚)

開花、着莢

35～40日

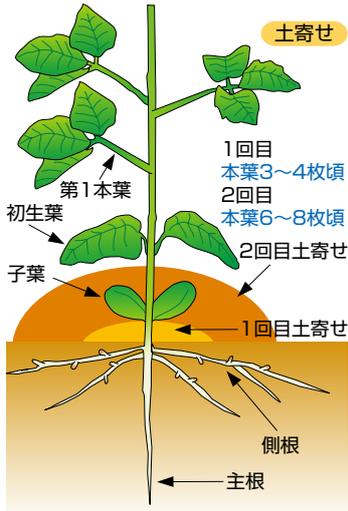
収穫

追肥…10㎡当たりチッソ成分で20～30gを施用します
灌水(乾燥に注意する)

土寄せと追肥

【土寄せ】

間引きした後は、根元に土寄せをして風に耐えられるようにします。草丈30cmぐらいになった時も土寄せするとよいでしょう。



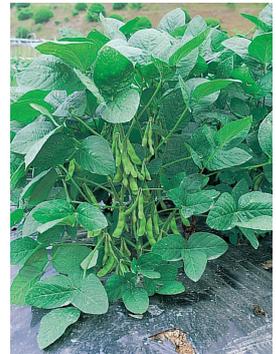
【追肥】

開花期から子実肥大期に肥料切れすると落蕾や落下が多くなるとともに子実の肥大が悪くなり、黄色も低下します。生育状況を見て草勢が弱い場合はチッソ成分で10㎡当たり20～30g追肥します。また灌水を兼ねて、液肥を施用すると効果が高くなります。

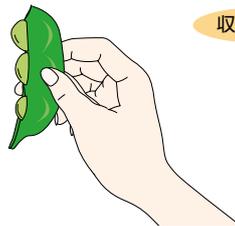
エダマメの収穫

【収穫】

エダマメの収穫適期は3～5日間と短く、早めの収穫を心掛けます。収穫適期の目安は、莢の大部分が充実し濃緑でツヤがあり、株の上部と下部にわずかな未熟莢があることです。

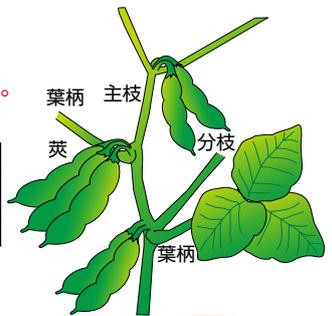


収穫の目安



莢がふくらんで、指で押さえると中の豆が飛び出すようになれば収穫の時期。収穫が遅れると、実が硬くなる。

極早生種	タネまき後	70～75日
早生種	タネまき後	75～80日
中早生種	タネまき後	80～85日
中生種	タネまき後	85～90日



エダマメの莢つき

莢と種子



摘芯と灌水

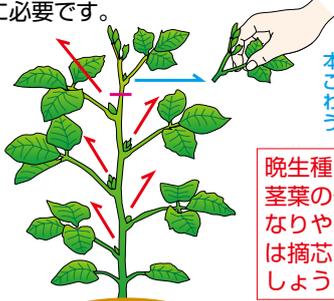
【摘芯】

本葉5～6枚時に摘芯すると草丈が低くなり、倒伏しづらくなるとともにわき芽が伸びて側枝にも莢がつき多収になります。(中生種～晩生種は主茎長が長い)

【灌水】

秀品率、特に3粒莢の割合を高めるには、乾燥させないように適期の灌水が重要です。開花以前の灌水は、分枝・節数を増加させるためであり、開花着莢期の灌水は落花・落莢を防ぎ、着莢率・秀品率を向上させるために必要です。

夏の高温期に入ると、受粉が悪く落花が多くなるとともに、病気や害虫発生も多く、草丈が大きいわりには収穫量が少なくなります。



本葉5～6枚のころ、摘芯してわき芽の伸びをうながす

晩生種や畑が肥沃で茎葉の伸びが旺盛になりやすいところでは摘芯するとよいでしょう！

根粒菌

エダマメは他の豆類と同じように根粒菌と共生関係にあり、根から吸収するチッソ成分量の30～50%を根粒菌に依存しています。根粒菌は開花後、もっとも多くなるので生育後半にチッソ分を根から供給してくれます。初期に土壌中のチッソ分が少ないと根粒菌は少なくなります。またリン酸が十分にあると着生がよくなるといわれています。

